

2015年10月22日

文京区長 成澤 廣修 殿  
文京区教育委員会 教育長 南 新平 殿

一般社団法人 日本建築学会関東支部  
支部長 長谷見 雄二

### 文京区立明化小学校の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、貴区におかれましては、「明化小学校改築基本構想検討委員会」を設置し、その整備方法について広く意見を募りつつ検討を進められておられることを、文京区のホームページにて拝見しております。

現在の明化小学校校舎は、関東大震災後の震災復興事業として東京市が鉄筋コンクリート造で建設した「復興小学校」と同じ設計組織と設計規格で1930(昭和5)年に建設したものであり、その歴史的価値は、本会において戦前に建てられた価値ある建築物をまとめた『日本近代建築総覧』[1980(昭和55)年]においても「価値の高い近代建築」として記されておりますこと、ご高承のことと存じます。

本建築は一連の復興小学校と同様に、耐震、耐火、衛生設備、合理的な構造モジュールや教育環境を配慮した建築計画など、震災復興期に東京市が考案した優れた設計手法による建物であると同時に、建設当初、地域住民から多額の寄付金がよせられたと記録されており、地域の学童育成に対する地域住民の高い意識と志を記憶する建物でもあります。また、廊下のアーチ架構や建具の造作など、昭和初期の豊かな意匠が良好かつ健全な状態で維持されており、いずれも改築では再現できない、貴重な資産を持つ建物といえます。その建築史的な価値は、①一連の復興小学校と同じく昭和初期の東京市の高い理想を反映した小学校校舎である、②文京区に特徴的な改築小学校としての都市計画的、建築史的な価値を有する、③昭和初期の鉄筋コンクリート造建築の豊かな外観意匠と室内造作を今に伝える材料・施工学的な価値を有すること、とすることができます。

貴下におかれましては、この貴重な建築の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、本建築の保存活用を図るための方途を積極的にご検討されますようお願い申し上げます。

なお、日本建築学会関東支部といたしましては、この建築の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

一般社団法人 日本建築学会 関東支部  
歴史意匠専門研究委員会  
主査 渡 邊 美 樹  
材料施工専門研究委員会  
主査 大 塚 秀 三

## 文京区立明化小学校についての見解

### 1) 建物の概要

東京都文京区千石 1-13-9 の文京区立明化小学校には、1930（昭和 5）年 6 月 15 日に竣工した鉄筋コンクリート造校舎が現存する。建物の規模は地上 3 階・地下 1 階建てで延床面積は 1,220.41 坪、竣工当初は 15 学級の規模で建設された。設計は東京市土木局建築課で、施工は浅野同族株式会社が行った。

小学校の敷地はほぼ矩形で、敷地の北西と南西は細い道路に面し、北東と南東を隣地に面している。昭和初期に建設された鉄筋コンクリート造 3 階建ての校舎が敷地の北西と北東に沿って L 字形に配され、校舎の南側には広い運動場が確保されている。後に増築された体育館と幼稚園は敷地の南西部寄りに建てられている。校舎平面は北側片廊下式で、長手方向の 1 階やや西寄りに昇降口を構え、各階の端部にはやや広めの特別教室を配し、中央部に普通教室 15 室を確保している。道路（廊下）側立面では窓の庇と水切りを連続させ、運動場（教室）側立面では各階にテラスを設けることで水平ラインを強調しており、外観全体に統一感を与えることに成功している（写真 1, 2）。内部はアーチ梁や木建具など竣工当初の造作が非常に良い状態で維持されており（写真 3）、昭和初期の東京市に建設された小学校建築の特徴を伝える貴重な建物である。

### 2) 歴史的価値について

#### ①「復興小学校」と「改築小学校」の共通点・相違点について

同校舎の歴史的価値は、同時期に同じ組織である東京市が建設した「復興小学校」との比較から知ることができる。まず「復興小学校」とは、東京市が 1923（大正 12）年の関東大震災で焼失した校舎をすべて鉄筋コンクリート造で改築した 117 校の公立小学校を指し、そこでは構造計画と関係づけられた合理的な平面計画、幅の広い片廊下・階段室と大きなガラス窓による採光・通風および避難への配慮、最新鋭の衛生設備や屋上の運動場など科学的見地に基づく児童の健康への配慮などがその特徴として知られている。日本建築学会はこの復興小学校の歴史的価値について、既に 2010 年 7 月 9 日に東京都中央区に提出した保存要望書「東京都中央区に現存する復興小学校 7 校舎の保存要望書」において詳しく述べている。

東京市はまた当時、これら復興小学校以外の公立小学校に対しても、木造校舎の老朽化や児童数増加などを理由に鉄筋コンクリート造校舎の増改築を行っており、このことにつ

いて『東京市教育施設復興図集』（東京市役所編纂、1932（昭和7）年）の序文には、「従来、我が東京市は鋭意、小学校施設の改善に務めてきたのであるが、かの大震災を契機としていわゆる復興小学校百十七校のみならず、残存小学校に対しても統一上之と同様の規模構造に改むべしとの見解の下に、漸次改築の計画を進め、既に竣工を見たるもの二十校を超え（後略）」と書かれている。これら小学校は現在、東京市の「改築小学校」と呼ばれて「復興小学校」と区別されているが、建築的には当時の復興小学校とほとんど同じ先進的な仕様で作られたことが藤岡洋保（東京工業大学名誉教授）の一連の研究によって明らかにされている。復興小学校と改築小学校の主な違いは、前者が焼失地域にあって帝都復興事業の土地区画整理事業を受け、換地後の校地がほぼ矩形で広い道路に面し、そこにL字形・コの字形平面の校舎を建設することができたのに対し、後者は焼失地域外であったために区画整理を受けず、従来からの不整形の敷地形状や悪い接道状況のまま、既存の木造校舎を一部残した状態での増築・改築が多く行われた点にあり、よってその違いは敷地の形状とそれに伴う建物の複雑な配置・平面形状に現れている。

## ②「改築小学校」としての明化小学校の特徴とその価値

明化小学校の特徴は、上述したような改築小学校でありながら敷地がかなり整った矩形をしており、そのため鉄筋コンクリート造の校舎もL字形の整った形状となり、接道状況を除けば全体として極めて復興小学校に近い構成となっている点にある。これは昭和初期の校舎改築以前に、敷地の拡張が何度か行われたためである。すなわち、1874（明治7）年の学校創立以降、敷地はもともと東側の隣地に接するL字形の不整形な土地であったが、1924（大正13）年に児童数増加を理由に校舎の増築と敷地の拡張が計画され、南西側の隣地（区有地）800坪が併合されて敷地形状と接道状況が改善された（図1）。この経緯については、公文書に「小石川区内ニ於テ同校附近ハ累年人工増加シ殊ニ震災ニ於テハ夥ク為ニ二十四学級中八学級ハ二部教授ヲ施行シ今日ニ至レリスノゴロ校舎狭隘ナルニ不関児童数ハ続々増加シ且同校ハ明治三十五年ノ建築ニカ、リ其ノ腐朽甚ダシク之カ改築ハ實ニ刻下ノ急務トスルモ現地ハ別紙図面ノ地形悪シキ為校舎建築上、支障不少故ニ改築ヲ計画シ此ノ際隣地ヲ買収校地ノ拡張ヲ計リ以テ児童教養上全カランコトヲ期セントスルニアリ」（大正13年7月15日、「明化尋常小学校々地増加の件、四、拡張ニ要スル理由」とあることからわかる。以上のことから、現在の明化小学校校舎の歴史的価値は、都市計画的には関東大震災以前からの公立小学校の敷地の変遷をよく伝えている点に、建築的には復興小学校に見られる昭和初期の東京市の先進的な試みを備え、現存建物にそれが良い状態で残されている点にある。よって、同校舎は「最も復興小学校に近い改築小学校の校舎の一つ」として評価することができる。

なお、公文書の分析から東京市の「改築小学校」と呼べる小学校は、少なくとも39校存在したことが確認できる（新設小学校の鉄筋コンクリート造校舎も含めると復興小学校以外の公立小学校は53校が確認できる）が、これを区別に見ると、最も多いのが小石川区で6校、次いで本郷区が5校であり、現在の文京区には全体39校の3分の1弱に相当する11校が存在していたことが知られる。これは小石川区・本郷区がともに非焼失地区を多く含んでいたためであるが、このことから「改築小学校」は、文京区に特徴的な昭和初期のビルディングタイプとして、高い建築史的価値を備えたものといえることができる。

### ③昭和初期の鉄筋コンクリート造建築を今に伝える材料・施工学的な価値

本校舎の廊下には2.85m間隔でアーチ梁が連続し、典型的な昭和初期の表現主義的意匠を呈している。このアーチ架構はコンクリート型枠職人の技巧が十分に凝らされたものであり、当時の職人技術の高さを記録する上でも大変貴重である。また階段の蹴上げ踏面、腰壁、建具や収納棚、黒板と教壇、枠まわりの線形などの木部造作や、階段手摺りの人研ぎ仕上げ、教室間の木製可動間仕切りや職員室の奉安庫も当初のまま残され使用されている。これらは全て、現代では容易に再現できない手作業にもとづく造作である。

さらに、昨年度実施された耐力度調査結果および目視調査から、本建物は建設後約80年のものであるにもかかわらずコンクリートの強度は十分に高く非常に良好（健全）な状態であり、耐震診断の結果も、 $I_s$  値が0.86を示すなど、建物としての耐久性能、耐震性能についても問題はない。また、強度が十分高いためにコンクリートの中性化深さも小さく、耐久性状についても問題の無い状態である。一方、鉄筋コンクリート造建築物が我が国に伝わって約100年となるが、その過半を経験している本建物は、今後保全して使い続けられることによってその材料学的な価値も増してゆく建物だといえる。

以上を鑑み、文京区立明化小学校は、わが国近代建築史上、極めて貴重な建築事例であり、また、文化財的価値も極めて高い建築といえ、今後も積極的な保存活用が求められる。

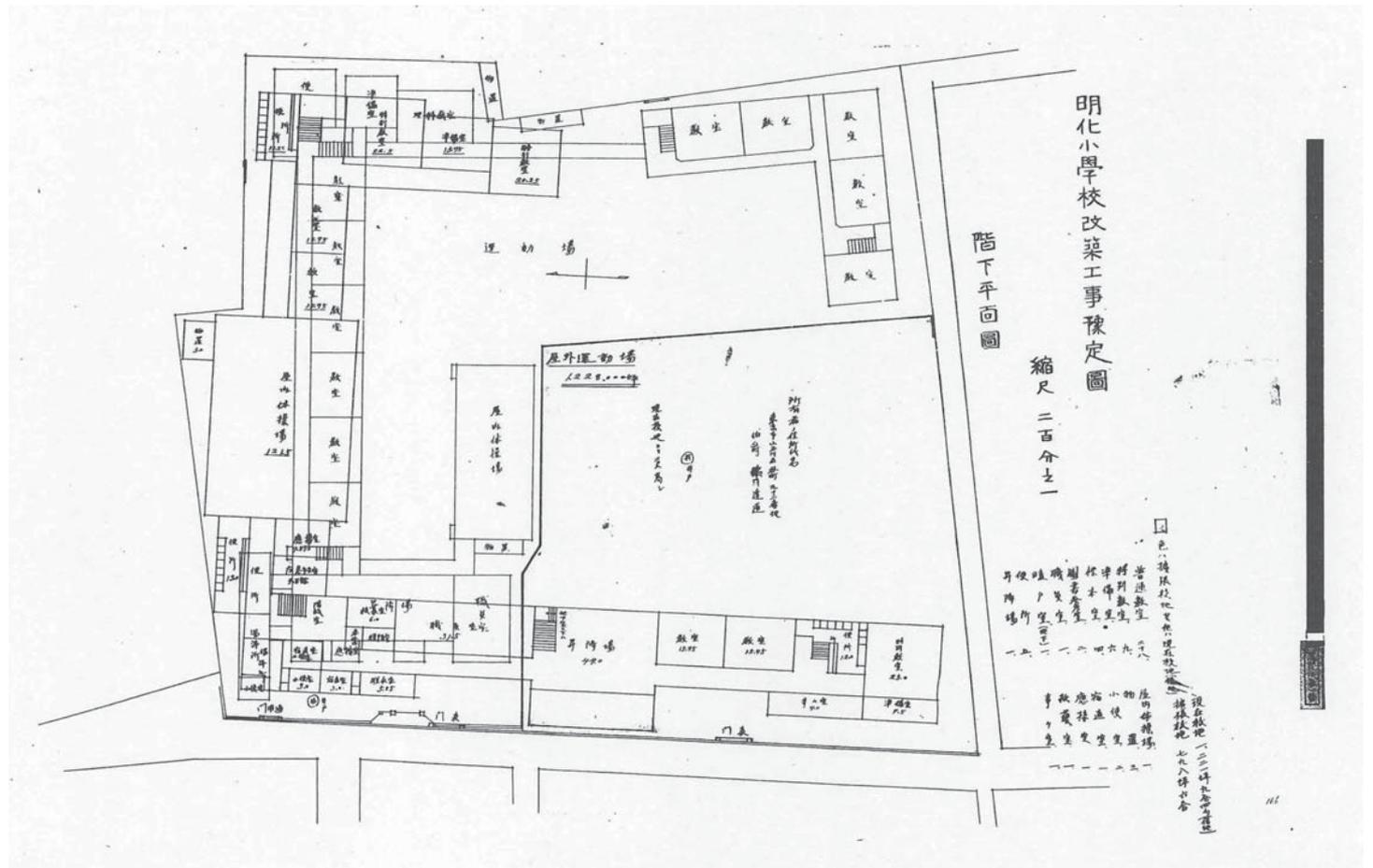




写真1 道路側立面



写真2 校庭側立面

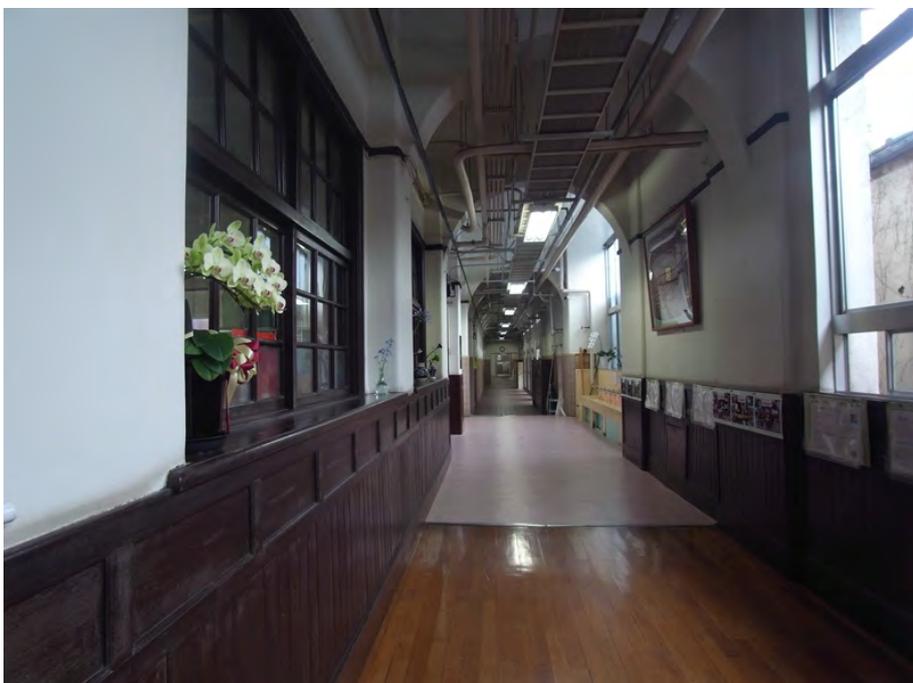


写真3 内部廊下